九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子どもの生活体験学習とコミュニケーションに関する研究

井上, 豊久
福岡教育大学

https://doi.org/10.15017/19991

出版情報：生活体験学習研究. 10, pp.43-51, 2010-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第10号　43－51（2010）

子どもの生活体験学習とコミュニケーションに関する研究

井　上　豊　久*

A Study on the Children's Life Experience Learning and Communication

Inoue Toyohisa*

要旨　本論文では、子どもの生活体験学習とコミュニケーションの実態と関係性、そして今後のあり方を明確にした。１．コミュニケーションの現状と生活体験学習の実態を⑴コミュニケーションの概要、⑵コミュニケーションの基となるもの、⑶傾聴の重要性、⑷言葉によらないコミュニケーション、⑸支え合いの人間関係、という内容で現代的な課題とその背景を体験学習の必要性という観点から考察した。次に生活体験とコミュニケーションの関係を⑴メディアにみる子どもの生活志向、⑵メディア生活体験とコミュニケーション、⑶生活体験学習によるコミュニケーション力の変容、という内容で子どもの現在の生活実態を明確にし、生活体験学習とコミュニケーションの構造化を図った。第３にコミュニケーション力と体験に関して質問紙調査結果からの考察を行い、最後に展望として⑴コミュニケーション力の育成と生活体験学習を統合的に考える、⑵生活体験学習不足の問題性への気づき、⑶利他的な主体的生活体験学習実践の拡充、の３点の提案を行った。

キーワード　生活体験学習　コミュニケーション　傾聴　メディア　共感性

はじめに

文部科学省の2008年度調査では「小中高校生暴力は最悪（６万件)」であり、「コミュニケーション能力不足」が要因としてあげられている。人間は日常生活の中でコミュニケーションをとり、コミュニケーションをとるからこそ、人間が社会的存在といわれる。「コミュニケーション」という言葉はラテン語のコモンという「共通の」「共有の」という用語からきている。人間同士の共感性や通じ合いが基本となり、何らかの共通部分が不可欠である。ただし、コミュニケーションは過程であり、動的・創造的で、自己と他者の間に共有物が拡充していくという、相互作用的な性質を有しているといえよう。

種々の子ども問題の背景に生活体験学習が不十分であるためにコミュニケーションができず、困難が生じているというだけではなく、生活体験学習とコミュニュケーションのあり方自体を検討する必要性がある。子どものコミュニケーションにとって、生活体験学習はどう関係し、そして、どのような時期に、どのような生活体験学習がどのように行われることが求められるのか。本論文では、先行の文献研究と共に論者等の行った調査結果を参考に実践的な考察を行う。

１．コミュニケーションの現状と生活体験学習の実態

⑴　コミュニケーションの概要

コミュニケーションの目的は、一般的には情報交換である。その他に相互に影響し合うこと、社会化をもたらすことなどがある。コミュニケーションは一方的ではなく、何らかの反応があることが必要である。生活体験学習を考える場合、コミュニケーションは例えば職場体験学習では仕事内容ややり方を説明し理解を促すことによる体験学習の効率化、といったようにコミュニケーションを行う際には、目的の

* 連絡先：〒811-4165　宗像市広陵台5-2-25　　井上豊久

明確化が求められる。こういった目的を達成していく場合には、具体的・現実的な目標が必要となる。言語的あるいは非言語的であっても共同生活を行っていく場合には必然的に具体的な活動でのコミュニケーションが必要となる。

コミュニケーションは個人の内部で行うもの、２人で対人的に行うもの、グループで相互作用的に行うもの、多人数に対して行うものなどがある。コミュニケーションは、一般的には目的や目標を達成するために手段として行うものが多いと思われるが、ストレス解消やコミュニケーションすること自体を目的とすることもある。簡単にどちらが目的とはいえない場合もあるが、子ども同士の会話でも何かの目的がある場合だけではなく、時には話すこと自体が楽しいということもあるということは容易に推測できる。

⑵　コミュニケーションの基となるもの

コミュニケーションの基となるものは当然、情報交換する自分自身と対象（他者）であり、そのありようが重要となる。しかしながら、それに加えて重要となるのが、生活体験学習であり自己や対象の過去の経験のあり方である。人間や子どもの感性や知性、そして理性は、外界との相互作用によってできあがってくるのである。しかし、生活体験をどのように認知し、感じ、そして考えるか、体験学習するかによってコミュニケーションの仕方は異なってくる。例えば、挨拶（あいさつ）をするということにおいても、挨拶の有用性をどれだけ感じられるかによって、挨拶の仕方や頻度も変わってくるのである。コミュニケーションは過去の体験の記憶や位置づけ、価値観などに基づいて行われる。いうまでもなく、コミュニケーションの目的の一つとされる社会化は他人との相互作用や集団での生活体験の中で、社会における規範を内面化したり、社会を協力してつくりあげていくのである。しかしながら、この生活体験が人間を介さない、例えば電子映像メディアのみであるとすると、感じ、認知する場合に、人間の社会の中で必要とされる微妙な五感を使って全体から読み取るといった生活体験学習はなされないことになる。

⑶　傾聴の重要性

学校などにおけるコミュニケーションに関わる体験学習ではディベートといった討論型のコミュニケーション学習や、相手に自分や内容をどう示していくかといったプレゼンテーション学習が多くなされている。上手な話し方、相手にどうわからせるかなどの、情報提供のための学習がこれまでは比較的重視されてきたといえよう。現実的には人間は自分のことを聴いてくれる人のことに関心を持ち、好きになっていくというコミュニケーションの過程が多くみられる。コミュニケーションに関わる生活体験学習として自己表現の前に、正しく聴く能力が求められている。聴くというコミュニケーションの過程は、感覚し、選択し、解釈し、保持し、想起するという多様な内容を含んでいる。人間は情報をすべて受け入れることはせず、コミュニケーションする場合には必ず情報の選択を行っている。その選択の基準となるものは何であろうか。

選択基準の１つ目は関心を持てることである。関心を持つことのもととなるのが、好奇心であり、アメリカの環境学習研究者の先駆者であるレイチェル・カーソンのいう「センス・オブ・ワンダー（不思議がる面白がる感性)」であろう。人間は好奇心という内発的動機づけによってコミュニケーションをとろうとするのであるが、生活体験学習の貧弱さはこの好奇心を枯渇させる恐れがある。与えられる、受け身の体験だけでは人間の好奇心は育って来ないのである。五感を使って遊び回り、生活の中での直接経験があってこそ、好奇心が芽生えてくるのである。最初から関心を示さなければ、重要な内容も見逃し、関心を継続・発展させることもできない。選択基準の２つ目は自分との関係性である。子どもは自分に関係がある、今後、関係してくると思う場合に情報を受け取ろうと思う。しかし、生活体験学習が十分でない場合、自分との関係性を感じたり、認知することが困難となる。生活体験学習の中で、他との関係性や、関係性の喜びを知ることによってこそ、関係性を感知することとなる。選択基準の３つ目は聴く内容への理解度である。聴く内容に対して自分が聴くことが困難すぎたり、不快に感じるようではコミュニケーションは成り立たない。聴くことに対して快適さを覚えたり、親密さや容易さを感じるため

には、生活体験によって聴くことの楽しさや聴く内容への体感的な理解、そして聴く技能を向上させていくことが重要となろう。聴き手が語彙力を増し、話し手の前後関係にある手がかりを注意深く聴くことによって、コミュニケーションはよりよくなる。

ただし、コミュニケーションは質問も含めて、共同作業であるということを確認しておく必要があろう。一方的に相手を攻撃したり、一方的に受身になるのではない、相手と相互に関係をつくりあげていくコミュニケーション方法こそ、今の子ども達に必要とされている。偏見や偏った価値観、不適切な推理、非論理的思考といった問題は生活体験学習の中で具体的にコミュニケーシュンを行い克服していくことが可能となる課題であろう。

⑷　言葉によらないコミュニケーション

コミュニケーションというと言葉によるものを想像しがちであるが、実際は言葉によらないコミュニケーションも多くなされ、現在の生活体験学習では、言葉によらないコミュニケーションの重要性を特に考えておく必要があろう。もちろん、一般的には言葉によるコミュケーションと言葉によらないコミュニケーションは組み合わせて利用される。例えば「おはよう」という言葉と同時に目や表情を見、笑顔を交換するのである。電子映像メディア体験だけでは、この言葉によらないコミュニケーション体験は少なくなる。例えば携帯電話のメールでは文字・絵の交換や音声言語だけになってしまう。しかし、直接話せば、その人の表情や態度、あるいは周りの状況を把握した上での相互作用が可能となる。現在の子どものコミュニケーションは、この言葉によらない多様で多層的な内容がどんどん減退してきているといえよう。

人間との体験学習も同年齢・少人数が多くなり、特に現在の高齢社会において世代間の体験差や格差は拡充し、より複眼的な生活体験学習がむしろ求められてきている。そのことは異文化を理解しコミュニケーションできる体験学習の現実が必要とされることに通じている。

⑸　支え合いの人間関係

コミュニケーションをしていく場合に直接的な情報交換関係だけではなく、直接的な関係をとりまく人間関係の雰囲気がとても大切である。コミュニケーションは人間関係を向上させ、信頼を創り上げていく過程でもある。その場合、人間は体験学習として、他人から否定的に扱われたり、批判されたり、時には惨めな感情を受けたりすることによって、コミュニケーシュンは消極的になりがちである。逆に子どもの場合、評価され、褒められることによって積極的になりがちである。コミュニケーションの根底には人間関係づくり体験や支え合いの風土づくりが不可欠である。

２．生活体験とコミュニケーション

文部科学省生涯学習審議会は1999年６月「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」という答申を示した。体験学習とは「体験による学習」であり、人は、体験を重ねるごとに知識が増え、認識力が高まり、五感が豊かになり、思考力や判断力が付いていき、経験を再構成し、行動の仕方が適切なものへと変容していく。体験の中でも、自然体験などを除いた生活体験全般について検討する。ここでは、論者も関わった調査結果を基に子どもの生活体験とコミュニケーションに関する考察を行う。調査の１つ（以下調査１）は小学生対象の「子どもの生活と読書等」に関わる調査（平成19年度、20年１月－３月実施)、関東および関西の５県８市15校で学校配布・回収を行い、1535件（有効回答1498件）の回答を得、中学生対象の調査（平成20年度、21年１－３月実施）は、同じく５県８市１町14校で学校配布・回収を行い、1782件（有効回答、1700件）となったものである。生活体験においては、時間的に子どもの生活の多くを占めるのはやはりメディアとの関わりの体験である。メディアは文字・活字である本から電子映像メディアといわれるケータイまで多様に、そして複合して子どもの生活の一部となっており、まず、生活体験の１つとして、子どものメディア体験の実態を探る。

⑴　メディアにみる子どもの生活志向

幼児教育の現場でも言葉の発達が遅い、目を合わせないなど、コミュニケーション力に問題が生じ、体の発達への影響も深刻化している。幼稚園児の中

表２－１　よく読む本のジャンル（小学生・性別）　[複数回答]

よく読む本のジャンル [第２回]			
男　子		女　子	
12．マンガ	608（82.8%）	12．マンガ	513（70.4%）
14．ゲーム攻略本	401（54.6%）	１．絵本	343（47.1%）
４．冒険・歴史物語	315（42.9%）	２．ファンタジー	276（37.9%）
11．趣味の本(スポーツ・料理など)	248（33.8%）	10．教科書	266（36.5%）
10．教科書	237（32.3%）	13．雑誌	244（33.5%）
１．絵本	228（31.1%）	６．昔話	242（33.2%）
９．図鑑・事典	224（30.5%）	４．冒険・歴史物語	235（32.2%）
６．昔話	188（25.6%）	11．趣味の本(スポーツ・料理など)	211（28.9%）
13．雑誌	177（24.1%）	14．ゲーム攻略本	183（25.1%）
２．ファンタジー	170（23.2%）	５．推理小説	169（23.2%）
８．学習に使う本	133（18.1%）	８．学習に使う本	162（22.2%）
７．伝記	118（16.1%）	７．伝記	157（21.5%）
５．推理小説	116（15.8%）	９．図鑑・事典	132（18.1%）
３．SF(空想科学小説)	68（ 9.3%）	15．その他	76（10.4%）
15．その他	43（ 5.9%）	３．SF(空想科学小説)	71（ 9.7%）
合　計	734		729

で、ゲームに夢中の園児を見ることがあるが、その子には子どもらしい表情がほとんどなく、笑顔がとても少ないことに気づかされる。現在、テレビやゲーム機などのメディア漬けになった子どもたちの健康を心配する声が小児科医の会などでも挙がっており、特に電子映像メディアとの接触時間の長時間化が問題視されている。メディアが進歩・肥大化しバーチャルリアリティー（仮想現実）といわれるまでに、映像や音響が緻密化するにつれ、仮想空間の生活を満喫する中でコミュニケーションに大きな課題を有する子どもも出てきている。子どもの生活上の嗜好を探る１つとして、よく読む本のジャンルを最初にみてみよう。

表２－１は、小学生の読書嗜好であるが、中学生もほぼ同様の結果であった。小中学生共に１位はマンガであり、中学女子では雑誌が２位で迫ってきている。伝記や小説・物語の割合は低い。それでも文字・活字に接することは、表現力の幅を広げるといわれる中、マンガが本とつながる可能性も示された。しかし、子どもの生活時間の中で占める読書の割合は低いというのが実態であり、その内容もマンガやゲーム攻略本など比較的視覚に訴えるものが多く、行間を読んだり、抽象的用語に接したり、深く考えるものは比較的割合が低い。以下、読書、マンガ、テレビ等の１日平均の接触時間を概観しておく。

１）読書（本）

小学生の平日の読書時間は「ほとんど読まない」28.7%、「30分くらい」46.9%、「１時間くらい」18.5%、「２時間以上」6.0%である。中学生では「ほとんど読まない」28.7%、「30分くらい」44.8%、「１時間くらい」19.2%、「２時間以上」7.2%である。二極化と言われることもあるが、ある程度の長時間読書している子どもはかなり少数である。

２）マンガ

小学生では平日のマンガ接触時間は「ほとんど読まない」18.0%、「30分未満」35.5%、「30分以上１時間未満」27.5%、「１時間以上２時間未満」12.0%、「２時間以上」7.0%である。中学生の平日のマンガ接触時間は「ほとんど読まない」21.4%、「30分未満」33.0%、「30分以上１時間未満」23.4%、「１時間以上２時間未満」13.6%、「２時間以上」8.6%である。本への接触時間より平均が長い。

３）テレビ・ビデオ・ＤＶＤ

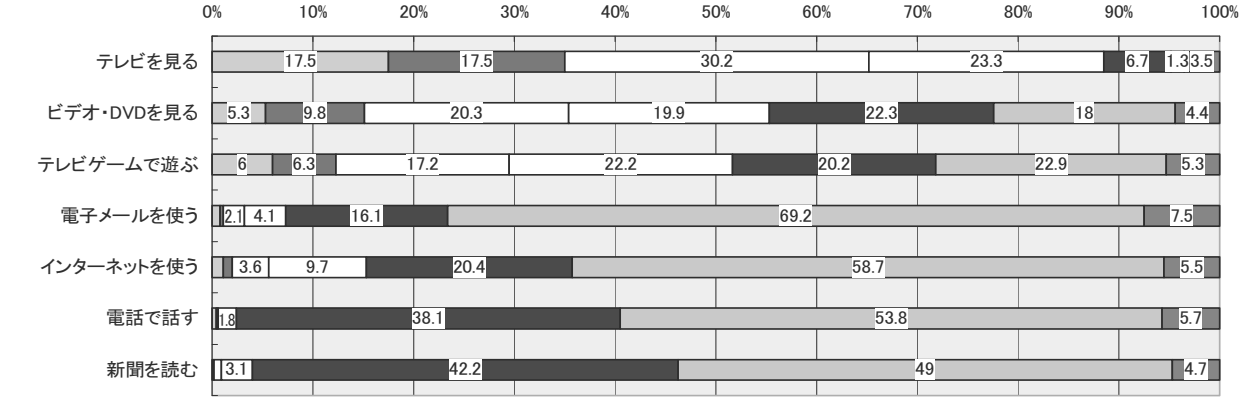
小学生では平日のテレビ等視聴時間は「ほとんど見ない」3.4%、「30分未満」7.8%、「30分以上１時間未満」15.1%、「１時間以上２時間未満」26.3%、「２時間以上３時間未満」19.3%、「３時間以上」28.1%である。中学生の平日のテレビ視聴時間は「ほとんど見ない」2.6%、「30分未満」5.7%、「30分以上１時間未満」11.2%、「１時間以上２時間未満」25.5 %、「２時間以上３時間未満」22.7%、「３時間以上」32.3.%と小学生よりも長めである。本、さらにマンガの接触時間よりもかなり平均として長いことがわかる。基本的にテレビなどの電子映像メディアに子どもの生活体験が奪われているといえよう。

以上が小中学生の生活上のメディア接触状況であるが、全体像が図２－１である。子どもたちの生活体験の実態がいかに直接体験などではなく、電子映像メディアに支配されているのかがわかる。ケータイのメールでは「読書は面白いから」という回答「とてもよくあてはまる」の割合は「まったくしない」では31.7%、「３時間以上」32.7%とほとんど差がない。メールが字を打つということで感覚的には文字・活字意識に近いとは必ずしもいえないのではと推測される。

⑵　メディア生活体験とコミュニケーション

2009年７月から９月文部科学省の委託研究で福岡教育大学生涯教育研究室とNPO法人子どもとメディアが全国の小中学生約9000人を対象に行った子どもの生活調査（以下調査２）からもメディアでは図２－２のようにメディア総接触時時間(テレビ、ビデオ、インターネット、ゲーム、ケータイ、マンガ接触時間の総計)が短いほど地域の人との挨拶をする割合が高い。

調査２の結果により図２－３にみられるようにメディア接触時間が長いほどコミュニケーションの基礎となる共感性が低い。また,本や新聞以外のメディアの中で、調査１全体で最も問題性がみられたのはゲームであった。ゲームでは「学校で飼育をしたことがあるか」という質問に対して「まったくない」と回答した割合がゲームを「しない」27.5%に対して「３時間以上」では47.9%と20.4ポイント高い。一般に同じ学校の同じクラスの子どもを対象にしている場合、学校での飼育体験認識度は同程度になると考えられる。しかし、「動物を飼育した」という意識が２割も低いのである。これは学校の内容に関心が薄いのではということだけではなく、動物や生き物に対する関心、親近感、関係性への意識、あるいは共感性が弱くなっているのではとも考えられる。共感性はコミュニケーション能力を支える１つの要



	新聞を読む	電話で話す	インターネットを使う	電子メールを使う	テレビゲームで遊ぶ	ビデオ・DVDを見る	テレビを見る
■無回答	4.7	5.7	5.5	7.5	5.3	4.4	3.5
□全くなし	49	53.8	58.7	69.2	22.9	18	1.3
■30分未満	42.2	38.1	20.4	16.1	20.2	22.3	6.7
□30分以上1時間未満	3.1	1.8	9.7	4.1	22.2	19.9	23.3
□1時間以上2時間未満	0.7	0.1	3.6	2.1	17.2	20.3	30.2
■2時間以上3時間未満	0.2	0.1	0.9	0.3	6.3	9.8	17.5
□3時間以上	0	0.4	1.1	0.8	6	5.3	17.5

□3時間以上 ■2時間以上3時間未満 □1時間以上2時間未満 □30分以上1時間未満 ■30分未満 □全くなし ■無回答

図２－１　本以外のメディア利用（小学生全体）

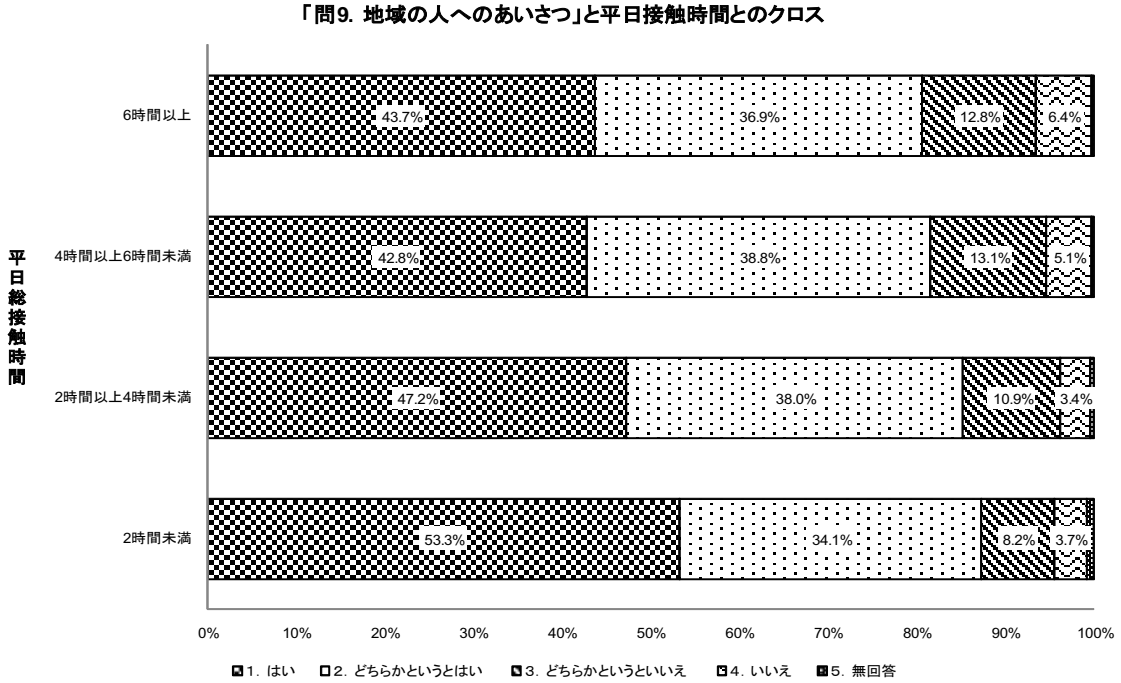


図２－２　あいさつとメディア接触時間

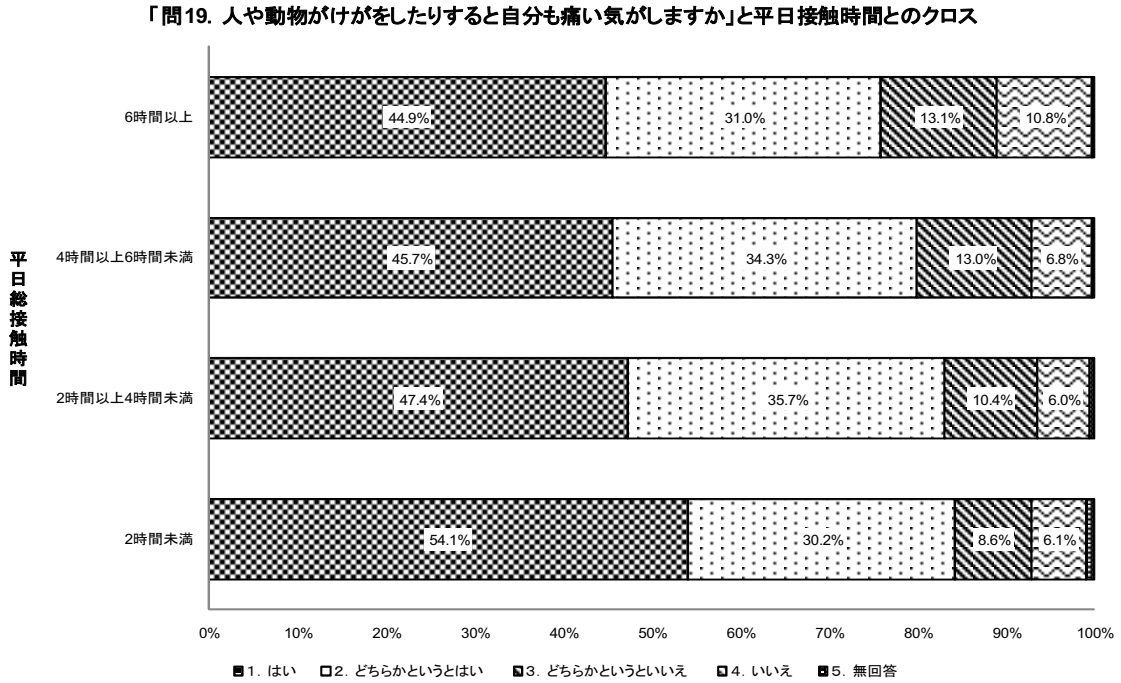


図２－３　共感性とメディア接触時間

因であると考えれるが、動物と直接接してきた体験学習の脆弱さが結果として表されているともとらえられる

⑶　生活体験学習によるコミュニケーション力の変容

2008年８月に９泊10日で福岡県立英彦山青年の家で30人の小中学生が参加する自然・生活体験学習が行われた。１ヵ月後の論者からのインタビューでは「相変わらずゲームはしている」ということであったが、合宿の結果、３人の不登校の子どもの２人が登校するようになった。この合宿はコミュニケーション力の育成に重点を置き、レクリエーション協会講師による体を使った人間関係づくり、そして、生活班活動を通じての生活体験学習を比較的長期に行うという特徴を持っていた。そこで、「友達と話し合

いで解決できる」というコミュニケーション力に関する質問へのアンケート結果もほとんどの子どもで向上していた。その内容の特徴は１つは同様の体験を繰り返すということである。一度目は失敗し、苦労し、そのことを個人と共に集団で振り返り、省察し、少しずつ共有することによって、２回目に活かし、また、共有していくという過程の有効性である。２つ目の特徴は生活体験という生活全体に関わる活動の中で、言葉による問題の解決という道筋が葛藤や大人の支援・促進のなかで、子ども主体で行われたということである。自分自身で自己決定し、コミュニケーションを責任をもって図っていくという体験学習が行われたのである。生涯学習の視点からみて重要なことはコミュニケーション力は自然に身に付くものではなく、体験学習によって育成するものであるということである。表面だけのコミュニケーションを突き破り、人間同士の精神的・物理的距離感を知覚しながら、情報は「構成する」という基本的理解と対話や会話に関する主体的実践力をもたらす学習である。

３．子どものコミュニケーション力の実態と他の事項の関連性

調査２から考察する。この質問項目の中で、直接コミュニケーション力と関係していると思われるものは「友だちとうまくやっていく自信がありますか」という質問事項である。

⑴　子どものコミュニケーション力の特徴

学年別にこの「友だちとうまくやっていく自信がありますか」という質問事項からコミュニケーションの特徴をみていく。以下の結果は全て有意差危険率は0.001以下である。

友だちとのつきあっていく自信は小４から中３にかけて学校種の学年があがるごとに下がっていく。小学生でも４年生では56%あったのが小６では44%、中学生では中１の43%から中３の32%と割合が下がる。性別には小学生ではあまり差異はないが、中学生では男子は40%だが、女子は32%と割合が低い。小学生で「お手伝い」を「よくする」では58%（中学39%）だが、「しない」では43%（中32）と家庭での生活体験学習で友だちとの自信の割合は異なる。「家族は一緒に何かをするのが好き」で「はい」は63%（中50)、「いいえ」34%（中28）と家族での共通体験が重要であることがわかる。「人や動物がけがをしたりすると自分も痛い気がする」に「はい」では57%（中41）、「いいえ」では47%（中35）であり、共感性の有無とコミュニケーション力では差異が出てくる。「クラスで決められた仕事は責任を持ってするする」に「はい」は65%（中51)、「いいえ」35%（中28）とクラスでの役割体験が重要であることがわかる。「人のために何かしたい」に「はい」は62%（中47)、「いいえ」37%（中24）と利他意識を持つことが重要であることがわかる。「地域の人へのあいさつ」でも「する」では60%（中46)、だが「しない」では37%（中28）と大きな差があり、地域での挨拶が出来るようになるということはコミュニケーションにとっても大切なことがわかる。

⑵　コミュニケーションとの関連性

直接コミュニケーションに関わる質問事項と他の事項との関連をみるため、相関係数をみてみる。小中学生共に最も数値が高かったのは「自分にはよいところがたくさんある」(小0.414、中0.422)であり、「普段あるがままの自分が出せる」(小0.101、中0.193）という自己表現よりも相関が高い。２番目に小中共に相関が高いのは「家族が自分を信頼している」(小0.311、中0.281）であり、小学生により相関が高い。家族との信頼関係、そのもととなる家族との交流体験学習がコミュニケーション力の基礎となるのではと推測される。３番目は小学生は「うちの家族は一緒に何かするのが好き」(0.278）という家族との体験の共有が大きいが、小学生の場合、高学年であっても家庭での体験学習の重要性がここでは浮き上がってくる。中学生は「明日学校に行きたくない」(0.278）という不登校意識との相関が高い。コミュニケーション力が中学では学校への不適応あるいは拒否意識と重なってきているのではと考えられ、コミュニケーション力をつけることによって学校生活も楽しくなる可能性を示しているといえよう。

４．生活体験学習とコミュニケーションの展望

⑴　コミュニケーション力の育成と生活体験学習を統合的に考える

コミュニケーションに関しては出生時からではなく、その前の時期である胎児の時期から生活体験学習は始まっている。胎児は、妊娠２か月での終わり頃から外耳・内耳がほぼでき、妊娠６が月頃に聴こえるようになるのではといわれる。母親のお腹の中で、母親の話し声や歌声が聞こえるだけではなく、外部の刺激を受けている。母親が胎児に「大切にしているよ、愛しているよ」というメッセージを届けることから愛着形成は行われる。乳児期には言葉は発することはできないが、コミュニケーションは泣き声と、それへの対応でとられることが多い。保護者は次第に泣き声の違いによって的確な対応・コミュニケーションがとれるようになり、コミュニケーションを介した信頼関係が構築される。山口県の小児科医の柳澤慧（さとし）は「サイレントベビー」(1998) という著書で、泣いてもかまってもらえず、何もコミュニケーションをとってもらえなかった赤ん坊は他者と関わることを拒絶するようになってしまうと警告している。自然や人間の中で、「生かされている」という存在を自分自身が感じるという生命感が根本にはあり、基本は心の問題である。近くにいる人間が何らかのコミュニケーションを示すことが生活体験学習としては重要となる。言葉のコミュニケーションが乳幼児期にはとりにくい。非言語のコミュニケーションは、例え言葉の交流ができなくても非常に大切であり、子どものコミュニケーション力育成の基礎となる。子どもの暴力性を減少させようとするのではなく、コミュニケーション力を生活体験の中から育むことが求められ、指示的・禁止的な方法ではなく、コミュニケーションをとりながらの「一緒に考えていく」方法が、これからのコミュニケーション力育成の方向であろう。

⑵　生活体験学習不足の問題性への気づき

ケータイ（携帯電話）に典型的にみられるように、電子映像メディア機器や機能の進歩は急速である。テレビ、ゲーム、インターネット、ケータイなどの電子映像メディアに関しては若年層ほど体験学習していることが多くなっている。楽器、絵、象形文字、活字、ラジオ、テレビ、ビデオ、ゲーム、インターネット、そしてケータイへと人と人、人と「モノ」をつなぐ媒介としてのメディアは肥大化・複合化を続けている。ケータイに代表されるように人類史上、年代や年齢が逆転した学習経験状況が電子映像メディアほど生じているのは希有であろう。しかし、社会はこの希有な状況の真実に気づいているのだろうか。メディア接触の長時間化の対極にある生活体験学習の不足問題に関して、親や教師や地域社会には、危機感を持った予防的な具体的対応が必要である。

確かにマンガや電子映像メディアは瞬時に大量の情報入手が可能となり、コミュニケーションの簡便化や多様化を育み、青少年の社会参画を促進する側面もある。

生涯学習の視点から重要なことは「メディアは構成する」という基本的理解と豊かな想像力や創造力を伴ったコミュニケーションに関する主体的実践力をもたらす学習である。調査２の結果からもメディア、特に急激な電子・ネットメディアの普及が子どもの生活や心身等へ悪影響を与え、多くの問題を含んでいることが考えられる。そうした中、親や地域がより信頼性の高い情報源となるだけではなく、親や地域が協力しながら生活体験の充実を図ることが緊要である。生活・文化の充実・振興、外遊びや文字・活字文化の創造に主体的に取り組んでいる学校や地域では、子どもの表情が豊かになり、コミュニケーション力の向上など成果を着実に継続発展している。

ただし、子どもの実態、生活体験、その家族のあり方、メディア接触、読書活動は多様化、二極化している傾向があり、生活を含め簡単には抜け出せない厳しい問題を抱える子どもまでおり、レベル・環境別の取り組み・学習が必要である。人間が大切にされる視点から生涯を見通した一貫したコミュニケーション力に関する基礎能力である生活体験学習の拡充が求められる。大半の親が集まる乳幼児期の健康診断時や小学校の入学説明会時などに生活体験学習に関する学習機会を提供したり、学校での体系的・認知的支援、地域社会での啓発・体験学習等を行うことが求められる。

⑶　利他的な主体的生活体験学習実践の拡充

親子が話し合え、学校や地域を巻き込んでの生活体験学習による信頼関係の構築とそれを支える環境づくりがコミュニケーション力育成の基礎となることを社会が考える必要がある。

１つの好事例が職場体験学習であろう。福岡県宗像市では11年前から職場体験を５日間約1000人の全ての中学２年生に義務づけている。学校は教育課程の編成と生徒指導、保護者は学校やキャリア教育支援・理解、子どもの精神的支援、地域や事業所（企業等）は、豊かな体験活動の場の提供、教育委員会は事業所の確保とコーディネート、と役割分担を行っている。現在では地元の商工会等の主体的な協働により、教員の負担は激減しているというが、そこではコミュニケーションによる信頼関係づくりが基本になっていると考えられる。そうした中で、教員へのアンケートではこれまでの職場体験学習の成果として「あいさつや返事ができるようになった」が71％と子どもの変容では最も割合が高く、子どもから学んだことでは「あいさつ・礼儀の大切さ」「感謝の心」とコミュニケーションの大切さを肌で感じ、実践的にコミュニケーション力をつけていったといえよう。

神奈川県が行った「ひきこもり等青少年自立支援プログラム」での「月一の会」の活動では、就労支援に対してコミュニケーションの要素を多く知り入れ、成果を示している。当初は、就労支援に対して職業技術の訓練が大半であったが、やめていく若者の原因が職場でのコミュニケーションが大きいということで、事前職場体験学習の場であるリサイクルショップで店長を始めスタッフが挨拶を自ら奨励したり、青少年の良い所を褒めたり、感謝の言葉を伝えたり、そして傾聴を行うことで、みるみる状況は変わっていったという。若者達の抱える問題は背景にコミュニケーシュン力に付随するものが多く、その根底には子どもの時期からの生活体験学習の不十分性が横たわっているのである。生活体験学習の充実無くして、子どもに対処的に対応しても根本的な解決には至らないということがわかる。

子どもたちが、からだや心、コミュニケーション力を豊かに発達させる場を確保するために、社会全体の取り組みが求められている。自然体験活動・外遊びや文字・活字文化、スポーツ・文化、家や地域での仕事や役割、そして社会貢献やボランティア活動の機会を充実させていくことが不可欠なのである。そのためには自己の有用感がより感じられ、自尊感情も向上しやすい利他体験が不可欠である。メディア文化創造だけではなく、子ども文化全体を子ども参画で構築していくことや、そのための生活体験学習充実のための環境づくりの取組が学校・家庭・地域・メディアを含めた社会全体で求められよう。

参考文献

＊コミュニケーション関係
１．津村俊充編『子どもの対人関係能力を育てる』教育開発研究所、2002年。
２．末田清子・福田浩子『コミュニケーション学　その展望と視点』松柏社、2006年。
３．矢島敬士『メディア・コミュニケーション論』コロナ社、2007年。
４．西川一廉・小牧一裕『コミュニーションプロセス』二瓶社、2009年。
＊メディア関係
１．川崎貴一『インターネット犯罪』文芸春秋、2001年。
２．藤川博樹『今　子どもたちが危ない！出会い系サイト』汐文社、2007年。
３．日本子どもを守る会編『子ども白書2009』草土文化、2009年。
４．高橋暁子『子どもにケータイ持たせていいですか』インプレスジャパン、2009年。
５．清水英夫『表現の自由と第三者機関』小学館、2009年。
６．芦崎治『ネトゲ廃人』リーダーズノート株式会社、2009年。
７．大山圭湖『中学生が考える　私たちのケータイ、ネットとのつきあい方』清流出版株式会社、2009年。
８．清川輝基・内海裕美『「メディア漬け」で壊れる子どもたち』株式会社　少年写真新聞社、2009年。